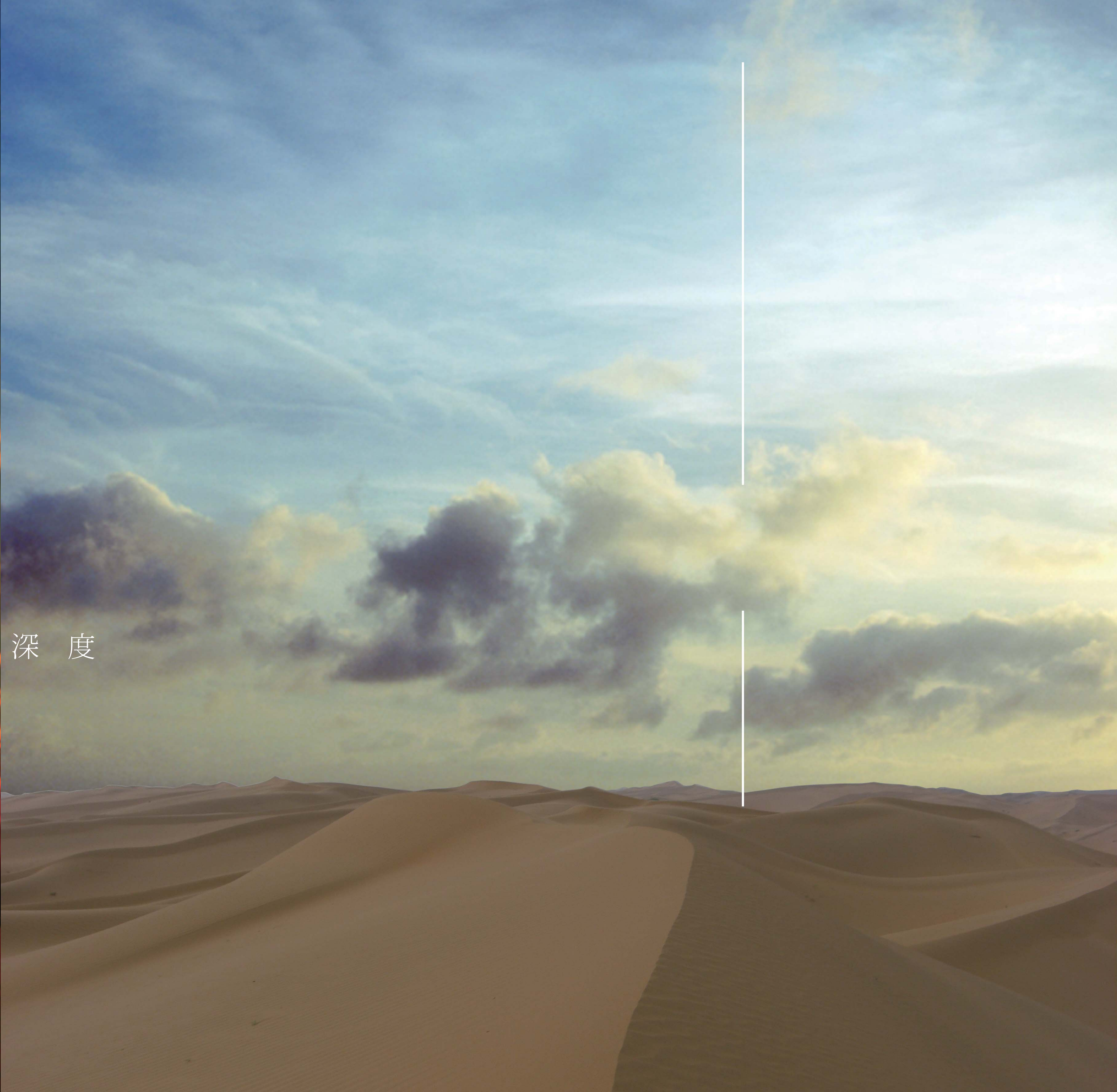




雲界深度



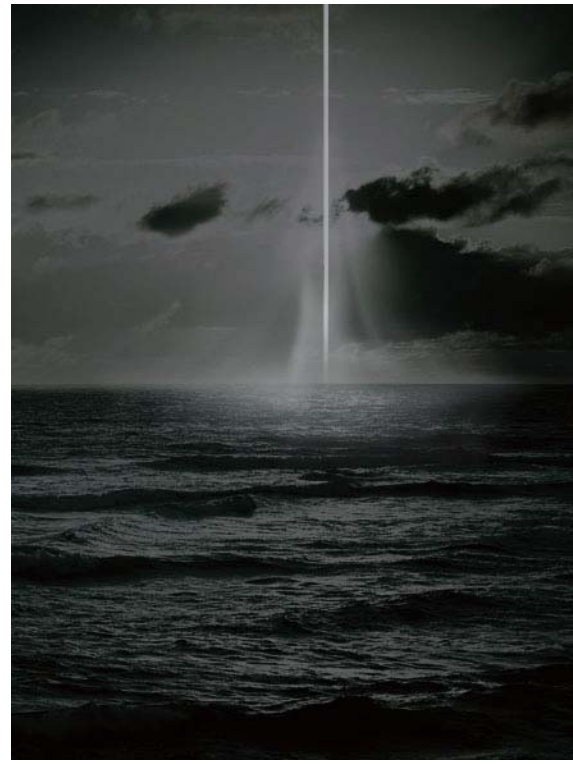
雲とは、大気中にかたまって浮かぶ水滴のことをいう。地球上の表面を浮遊し、その密度を変えていくことで、地上に雨が降る。

雲をつくりだす方法

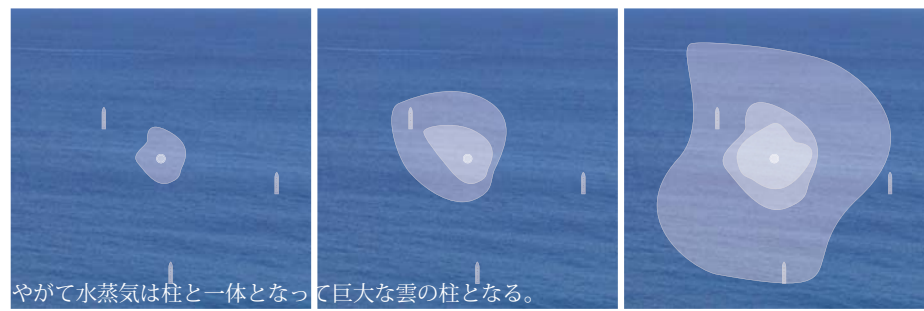
はるか7000mにも及ぶ円柱の鉄塔。海面から真っ直ぐに空へと伸びる。海面にほど近い場所では鉄塔の温度は高く、上空に行くにしたがって冷えていく。結果、鉄塔内部に気温差、圧力差を生じさせ、雲をつくりだし、対流圏へ放出させる。

雨を降らせる方法

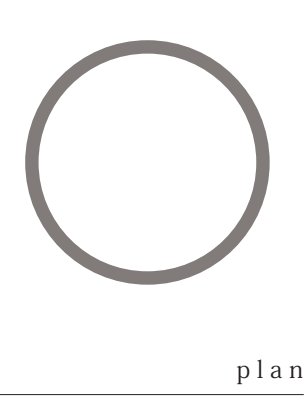
はるか10000mにも及ぶ十字の白い塔。それは縦に伸びる空の指標となり、砂漠に雨を降らせる装置となる。水蒸気が塔に触れ表面を伝い、その水蒸気自身の重力と、風力が働くことで十字にねじれが発生し、砂漠に水蒸気が還元され、線上の雨がきずかれる。



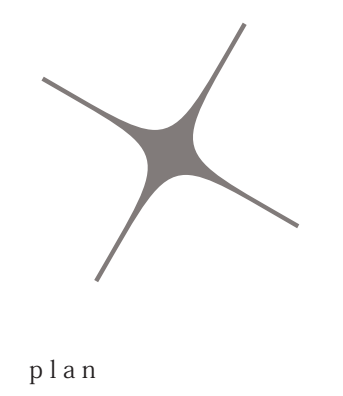
雲を纏った柱はランドマークとなり、海上の指標となる。



やがて水蒸気は柱と一体となって巨大な雲の柱となる。



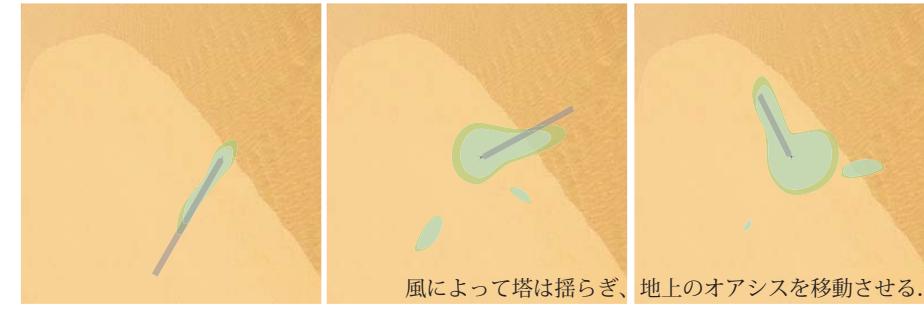
筒状の鉄柱の内部に温度差、圧力差の発生を促す。空気中の塵を含有させるため対流圏に小さな穴を無数にあけ、雲が発生しうる、高さ2000mより上に気圧を下げるための開口を設ける。



塔の平面を十字に計画し、表面積を大きくすることで、空気中の水蒸気との接触を促す。同時に風の抵抗を受けやすくなり、静かに塔は揺らぐ。羽の合間にたまった水滴は、塔の揺らぎとともに地上に雨をもたらす。



塔によって砂漠に雨が降り、オアシスがうまれる。



風によって塔は揺らぎ、地上のオアシスを移動させる。

